

カメラとモデル

私は小学校の時から写真に興味があり、小さい写真機を買い、兄弟や近所の子供達を写し、暗室を作り、現像、印画紙に定着させ、得意になっていた。フィルムは一枚ずつの単品であった。

薄暗い押入れの暗室で、現像液に浸けたフィルムに白黒反転した画像が現れるのを、心躍らせじつと待った幼き時代を思い出す。それを定着液に一定時間浸け、水洗いを充分行い、フィルムの端を洗濯はさみで適当な所に吊し乾燥して出来上がる。

印画紙に定着させるのも大体同じ、印画紙にフィルムを重ね電球の光を何秒か当てる。画像が適当になったとき、すばやく定着液に入れる。遅かったり早かったりしたら満足な写真が出来ない。

写真を撮るのもフィルムの感度が悪かったので、今では呆れるばかりだが、早くて一秒、普通二〜三秒、天気の良い日には五〜六秒以上露出する時もある。その当時は写真機と言っていた。何かの台の上固定し「動くな」と言ったものだ。その時写した写真が残っている。

その後結婚するまで写真機の事は頭から離れ、忘れ去っていたが、結婚してからカメラが欲しくなった。約六ヶ月の出漁後、釜石に帰港、妻と再会、釜石船員会館に泊った。二人でカメラ屋に行き、あの時は値段が高かった「オリンパスシックス」を買っ

た。ジャバラが飛び出し、六センチ×六センチに写る、ロールフィルム式の高級機だった。

それで虎の子のカメラに夢中になった、よく写るカメラだった。休暇で故郷に帰り写真を撮りまくった。平沢の両親、兄弟、矢附の親子、風景、とりわけ未っ子の「とく」は可愛いざかり、モデルよろしく一番多く撮ったのを、ありありと思い出される。

船団を組んで、南方のマグロ漁に行った時の写真が多く残っている。下船後、向山の父の生家の法事で撮った写真はプロ並に撮れていて、皆に喜ばれた。フィルムは親戚をたらい回しされ、焼き増しされていた様だが、フィルムはとうとう戻って来なかった。

あの当時はカメラを持っていない人は少ない。今では高級機と言えば三五ミリ、一〇万円位はする。私はその後仙台で電気店を開業したので、写真の方はお留守になった。ずっと後で安物の三五ミリカメラを買ったが、オリンパスシックスはどうなったか、思いだせない。

デジタルカメラは、最初に横浜の義弟に貰った。それが故障し、二代目は洋一に貰い、三代目は洋一と二人で品定めしてニコンのものを買った。

デジカメとパソコンで即座に写真を作る。又インターネットで子供達や、兄弟、姪などに一瞬に送れる。昔の写真機を思い、パソコンの時代まで生きられた私達夫婦は、歴史の一ページに浸り幸せ者だ。